5章

【問題】（演習／共通問題）

出典…今井賢一『情報ネットワーク社会』／横浜市立大学　商学部　98年

文章略解

流通と金融は、いずれも経済社会における連結（インターフェース）の仕事である。消費者の欲求の情報を集め、それに合わせて品揃えをし、配送するシステムには相応の流通コストがかかる。このコストを節減する「流通革命論」が一時期脚光を浴びたが、日本の消費者の欲求は細かく、これはアメリカのようには根付かなかった。今後の情報ネットワーク化社会では、消費者が本当に必要とする情報を提供する機能の充実が求められよう。

解答

問1　経済社会における連結の仕事である〔16字〕（1行目）

問2　大規模な小売店が都市の景観と人の流れを変えること。〔25字・解答例〕

問3　大量生産と大量販売を対応させてコストを削ること。〔24字・解答例〕

問4　日本の消費者の細かな欲求に対応するには、情報を集め、品揃えや配送を調整するシステムが多く必要だから。〔50字・解答例〕

問5　問屋による情報提供の機能を無用だとみなしたこと。〔24字・解答例〕

問6　商品の流通においては、コストを節減するべく、メカニズムの合理化をすべきである。ただし合理化一辺倒ではなく、消費者にとって本当に必要な情報を吟味して提供する機能を高めて便宜を図っていくべきである。〔97字・解答例〕

【問題】（自習／共通問題）

出典…星寛治『農からの発想』／一橋大学　前期日程　95年

文章略解

現代の技術文明は、もろもろの矛盾を生み、もはや修繕のきかない絶望的状況になっている。人々はその絶望的状況に薄々気がつきながらも、利便と快適のぬるま湯を脱する勇気を持たず、口先だけで改革の提言をしているだけである。現実を直視することは恐ろしいが、このまま破滅に導かれるなら、今の段階で価値体系を逆転させるぐらいの覚悟があっていい。今求められているのは、文明の構造的な変革をするための捨て身の努力である。

解答

問1　(a)＝言葉をさまざまに用いて主張をすること。〔19字・解答例〕
(b)＝現実的な行動を伴わない空疎な発言。〔17字・解答例〕
(c)＝悪かったものが一時的に持ち直した状態。〔19字・解答例〕

問2　A＝(オ)　B＝(キ)　C＝(ア)　D＝(エ)

問3　現代文明の絶望的な状況を脱する見通しがつかないという認識。〔29字・解答例〕

問4　表面だけの曖昧な解決策だから。〔15字・解答例〕

問5　人類が破滅に進んでいるという危機意識に基づき、現在の価値観に甘んじている人々に警告を試みているから。〔50字・解答例〕

※　問1の解答欄はそれぞれヨコ1㎝×タテ15㎝。右の解答例はその大きさに合わせて20字以内に揃えてある。

解説

問1　設問の指示は「それぞれどういう意味か」ということであるから、それぞれの表現の辞書的な意味を踏まえつつ、傍線部分の前後との関係にも留意して解答を作っていくことを心がけよう。

(a)の「弄する」とは、「もてあそぶ」ということ。したがって、「言を弄する」とは「言葉をもてあそぶ」＝「言葉をいろいろに用いる」ということになる。この場面では、直前に「頭のなかで、今日の破綻を理解し、告発の……」とされていることから、「（うわべだけの）発言がなされている」というニュアンスも添えておきたい。

(b)の「空念仏」は、元々は「実効のない念仏」＝「題目だけの説教」の意味である。ここでは、直前に「安全地帯から状況の変革を叫んでも」とあることから、「現実を伴わない」「実効がない」発言である旨が指摘できればいい。

(c)は、病気の状態を述べる際などによく用いられる語である。「小康」の「康」は「健康である」、つまりは「本来あるべき状態・落ち着いた状態」のこと。これが一時的に訪れているのが「小康状態」である。ここでは、「石油ショック……」（29行目）以下の社会状況との関連で述べられていることに合わせて、「基本的には悪い状況が一時的に持ち直した」というニュアンスが指摘できていればいい。

問2　まずはそれぞれの語の機能の確認から。(ア)は逆接・対比、(イ)は前との関連がある後の語に対しての強調、(ウ)は後に続く語に対しての単なる強調、(エ)は比較、(オ)は累加、(カ)は注釈、(キ)は要約・換言、である。

こうしたそれぞれの語の機能を踏まえてから、あとは入れやすいところ（入る必然性の高いところ）から入れていくことを考えよう。

最も入れやすいのはDか。直前に「突進するためのものだけではなく」とあり、それと比較する形で直後に「……撤退する決断をもあわせもつこと」を筆者は提唱している。このように、相対する二つのものを比較して後を持ち上げるというはたらきは、まさに(エ)の「むしろ」の用法に相当する。

Cについては、この空欄が段落の冒頭に設けられていることから、段落単位で前後を見比べることを考えたい。前段落では「実

相を直視すること」の「恐ろし」さ（22行目）について述べられており、これを受けてこの空欄を含む段落では「撤退する決断」（25〜26行目）の必要性を説いているのである。「恐ろしい」、しかしながら「決断」が必要というわけだ。ここに入れるのは、逆接の接続詞(ア)が最適ということになる。

Aについては、直前の「ぬるま湯に体をつけたまま生きている」と、直後の「住民エゴのとりこになっている自画像に気づくこともない」とが、いずれも現代社会に生きる人々の態度に対しての筆者の批判であることを押さえたい。このように、同種の内容を畳みかける際に用いるのは(オ)の「そして」。この語は非常に守備範囲の広い語であるが、このような用法が本来的なものである。

BもCと同様に、段落単位で前後関係を見比べていくといい。空欄直後で「悪循環を自ら断ち切る少しの努力もしないままに、反公害を叫ぶ」とされているのは、先にAのところで検討したような人々の態度に対しての批判をまとめる形になっている。だとすれば、ここに入れるべきは(キ)。

問3　「論旨を踏まえ」という設問の指示は、「この部分だけを言い換えるのではなく、この文章全体の論旨との関係で意味を説明せよ」という意味に解釈できよう。

しかしながら、あくまでも傍線部分の表現に根ざすところから解答は作られるべきである。ここでは「日光のとどかないトンネル」という比喩から、「しばらくは明るい見通しがない」というニュアンスを導きたい。まずはこれが基本。

ではどのようなことに関して「しばらくは明るい見通しがない」のか。ここで「論旨を踏まえて」考えていく必要が生じてくる。とは言っても、それほど難しい作業ではなかろう。**問5**の設問文にもあるように、この文章の筆者（星寛治）のモチーフは「現代社会の行きづまり」を批判することにある。だとすれば、ここで「しばらくは明るい見通しがない」とされているのは「現代社会の状況」ということになる。

以上二つのポイントが含まれ、三十字以内でまとめられていればOK。

問4　設問は、「作者はなぜいうのか」と問いかける形になっている。この指示は、傍線部分の表現がいかなる意味で「優柔不断な塗装」と言えるのか、という意味づけの指摘を求めたものと解されよう（一般に、理由説明の形を取っていて、該当の箇所が比喩的な表現の場合には、その比喩の意図するところを指摘することが作業課題になる）。

ここでは、傍線部分直前の「対症療法でごまかして当座をつなごう」という記述と関連させて考え、本質を見据えないままに何となくうわべだけをごまかしている態度を評していることを押さえたい。この傍線部分は、「当座をつなごうとする」解決の態度に対する批判なのである。前提としてこのことを押さえたい。

その上で、傍線部分のそれぞれに相当するように解答の言葉を選んでいけばいい。①「優柔不断」から「はっきりしない・曖昧である」というニュアンスが、②「塗装」から「表面だけ」というニュアンスが、それぞれ導けよう。

問5 設問の意図は、筆者が「現代社会の行きづまり」をなぜ「どんづまり」「墓穴」という比喩で表現しているのか、という問いかけである。つまり、この比喩的表現に込められた筆者の心情を説明することが作業課題となるわけだ。

その解答を導くためには、これらの表現の意味を検討していくことが前提となろう。「どんづまり」「墓穴」という表現は、いずれもかなり強いニュアンスを帯びている。単に「行きづまり」とだけ言わずに、筆者がこうした強いニュアンスの語を使うということは、読む人に対して「注意を促したい」「気づいてもらいたい」という思いがあることの反映であろう。まずは、①「現代社会の危機的状況に対して注意を促したい」という旨の指摘がほしい。

しかしながら、これだけでは制限字数に遠く及ばない。設問では、もう少し突っ込んだ説明が求められているわけだ。だとすれば、ここで筆者がなぜ①をするべきだと思ったのか、という理由付けをしていけばよかろう。「注意を促したい」と思うからには、注意される相手がそのことに「気づいていない」という状況認識があるからである。筆者は第三段落（8行目）以下でくり返し、現代社会における人々の態度に批判を加えている。このことは現代社会の危機的状況にもかかわらず、人々の多くが②「現状追認的」もしくは「現状を積極的に変えようとしない」態度であることに対しての筆者の憤りと解釈すべきであろう。

以上二点が指摘された解答ならば基本的にＯＫ。

【問題】（演習／一橋大対応問題）

出典…作田啓一『恥の文化再考』／一橋大学　05年

文章略解

《解答》に同じ。

解答

日本の高校野球は、日本人の精神構造の象徴である。もとより野球はスポーツであるが、高校野球は遊戯というより宗教的儀礼に近い。なぜなら、遊戯も宗教的儀礼も世俗生活の対極にあるという点では共通するが、遊戯がさほど勝敗に執着しないのに対して、宗教的儀礼では勝つことが絶対だからである。高校野球における勝敗への異様な執着は、儀礼の成否が世俗生活の成否に直結すると信じる日本人の宗教性をよく表しているのである。〔199字〕

【問題】（自習／一橋大対応問題）

出典…鹿野政直『化生する歴史学』／一橋大学　06年

文章略解

《解答》に同じ。

解答

歴史学は過去による現在の規制を自明の前提としていた。一九八〇年代に日本で実現した豊かさの満足感から歴史意識が希薄化すると、過去を現在と断絶したものとする意識が生じて、実は歴史学が現在から過去を規制していたことが自覚された。九〇年代には歴史への関心が回復したが、過去から現在への連続性を切断する探究姿勢とともに、現状本位の諸学問による過去解釈も一般化して、過去探究における歴史学の優位は失われつつある。〔200字〕

解説

設問に言う「要旨をまとめ」る問題の解説に先立って、《要旨》とその関連事項について整理しておこう。入試では「要約せよ」という表現の出題も多用される。《要約》と《要旨》との違いは、およそ次のように説明できる。

＊要約……もとの文章の各《形式段落》から《中心文》をそれぞれ抽出して順に並べたもの。

・原文を相似的に縮小することに主眼を置く。

・通読して意味がわかりやすいように多少の加工を施すことはある。

（なお、「中心文」とは欧文のパラグラフにおける「キー・センテンス」または「トピック・センテンス」に相当するものを言う。）

＊要旨……もとの文章を《意味段落》の集合と見做して、各《意味段落》をそれぞれひとつの文にまとめて並べたもの。

・原文にこめられた論理構造から筆者の主張を明確にすることに主眼を置く。

・原文が《尾括型》または《頭括型》の構造なら答案もそれにしたがうが、《双括型》の構造なら「尾括型」に整理する。因果関係にしたがって《頭括型》の文章を《尾括型》に編成し直すこともある。

（なお、「尾括」・「頭括」・「双括」はそれぞれ文章全体の中での結論となる意味段落の位置による分類で、「尾括型」は「帰納的」構造、「頭括型」は「演繹的」構造と言うこともできる。また、**《論旨・趣旨・主旨》**も、本来の語義・用法は多少とも異なるものの、設問文中の表現としては《要旨》に準ずるものと考えてよい。）

さて、実際の大学入試問題では、設問に「要約せよ」とあっても、同時に字数制限が設定されるのが普通だ。（「〇〇字以上〇〇字以下」とあれば上限と下限と両方とも明示されたことになるのは当然として、「〇〇字以内」という表現も、大学入試問題の答案としては「制限字数の八割を超える」ことが暗黙のうちに求められるので、事実上やはり上下限両方が示されたに等しい。）ここで右の《要約》の説明を確認してもらいたい。要約は本来なら機械的な作業とも言えるのだが、要約した結果の字数は原文（＝問題文）の構成によってすでに決定されているようなものだから、要約は字数制限に馴染みにくいことがわかるだろう。よって、「入試問題の設問用語」としての「要約」は、結果的には《要旨（論旨・趣旨・主旨）》と同義だと解釈せざるを得ない。

次に、要旨を構成する個々の文の長さについても確認しておこう。「一文の長さは五十字程度を目安とせよ」とよく言われる。とはいえ論理の上でも文法の面からも必然的な根拠があるわけではないから、とくに「五十字」に拘泥する必要もないのだが、たしかに五十字を超える文は（《単文》や《重文》でなく）《複文》の構造になることが多く、係り受けのミスを犯しやすいとは言える。経験則から導かれたコツ・秘訣として、尊重して損はない。意味段落中の表現要素が豊富だと対応する文も長めになりやすいが、一文が百字にもなりそうな場合は、無理に構造の複雑な文を作らずとも、その中の《節（＝述語成分を含む連文節）》を単位として文を分割してもよいということだ。

とすると、要旨の制限字数を「五十」で割った値は、原文の意味段落の数の近似値として問題文読解のヒントになるはずだ。むろん意味段落が分割できるポイントのギャップには強弱があって一概には言えないが、たとえば制限字数が二百字なら、原文を三〜五程度の意味段落に分割（してそれぞれを一文で表現）することが期待されるというわけだ。

以上を前提として、問題文の文章構造の確認と答案作成上の注意点の解説に移ろう。問題文は十個の形式段落からなる。意味段落に整理してサブタイトルをつけるなら次のようになる。

・意味段落1……第1～3段……八十年代の歴史ばなれと、その社会的背景
・意味段落2……第4～5段……従前の歴史学の過去観と、その観点から見た「歴史」の変化
・意味段落3……第6～8段……歴史学に対する、歴史ばなれの影響
・意味段落4……第9～10段……九十年代の歴史回帰の実相

ただし、右の「意味段落2」は時間的に「意味段落1」に先行する内容を含んでおり、かつ第5段は「歴史学にとっての歴史ばなれ」の説明で、「学生の歴史ばなれ」を言う第3段と共通の要素を含んでいる。「意味段落1・2」間のギャップは「2・3」間や「3・4」間のギャップより小さいということだ。よって「意味段落1・2」はひとつにまとめて考えることもできる。制限字数には「二〇〇字以内」とあるから、答案を三文で構成することも不自然ではない。

さらに、《要旨》とは「筆者の言いたいことを端的にまとめる」ことだから、答案としては時系列に沿ってまとめるほうがスッキリしたものができる。この観点から問題文の重複要素を整理し直すと、次のようになる。解答例はこれによって作成した。

・第1文……従前の歴史学の歴史観
・第2文……八十年代の社会的背景、それが引き起こした歴史ばなれ、その歴史学への影響
・第3文……九十年代の歴史回帰の実相

「第1文」は内容が単純だから短い文で表現できる。その分だけ他のふたつの文が長くなるが、「二〇〇字」を三文で構成するのだから、一文が百字を超えないように配慮するのは前述のとおりだ。（第2文・第3文をそれぞれ複数に分割して表現することもできるが、字数が余計にかかってしまうので、全三文に整理できていれば十分だろう。）

解答例中の個々の表現や表記に関する注意点にも、出現の順に触れておく。答案の自己評価や今後の類問での練習に役立ててもらいたい。

西暦年などの「数の表記」については、縦書きでは「位取り漢数字」が原則となる。「80年代」のような表記は避けて、本来は（右の「第2文」の内容確認部にあるように）「八十年代」などとすべきだ。ただし、問題文中で筆者が「一九八〇年代」と表記している

のを「千九百八十年代」などとするまでのことはない。「位取り表記」でこそないが、漢字ではあるから、筆者の表記に従っておけばよい。また、筆者は問題文中で年代を表記するのに、初めは「一九八〇年代」・「一九七〇年ころ」としておいて、「九〇年代」は上二桁を省いている。答案でも同様に、字数が許せば最初は「一九八〇年代」としておきたいところだが、《要旨》の答案だから、初めから「八〇年代」と書いても、採点者は常識的に判断してくれるだろう。

「歴史ばなれの背景」（筆者の言う「基礎要因」）については、筆者はかぎ括弧つきで「豊かな日本」としている。このかぎ括弧つき表記は、辞書的な意味合いで書いているのではなく文脈に依存する意味合いを込めているぞ、とも取れる。国語の答案では一般に、文脈義を含む表現は通常の辞書的な意味合いで理解できる表現に換言することが期待されるから、そのままで引用するのは避けるほうがよい。ここではさほど特殊な意味合いではなく「高度経済成長後の経済的繁栄」を意味する「慣用句」的な表現にすぎないから、かぎ括弧つきで引用することを避ければ十分だ。ただし、筆者は「歴史ばなれ」が世界的な潮流だったとは一言も言っていない。「日本」を落としてはまずいだろう。

「歴史ばなれ」という語については、「豊かな日本」ほど一般的な慣用句ではなく、これだけでは意味がわかりにくいので、できれば適切に言い換えておきたいところだ。第8段落で筆者が用いた「歴史意識の希薄化」のほうが具体的だから、これを用いればよいだろう。

さらに、右で整理した「第1文」から「第2文」にかけての答案要素の割り振りに注意すること。「歴史学は ……　していたが八〇年代に歴史ばなれが起こった。すると歴史学は自己点検を迫られた」などとして「歴史ばなれ」の説明を第1文の後半に組み込んでしまうと、ふたつの文の対応関係が不明瞭になる。問題文は「歴史ばなれ」でなく「歴史学の地位の凋落」を結論としており、「歴史ばなれ」そのものは帰結ではない。「歴史学における歴史観の変化」の要因・前提条件として、第2文前半に置かなければならない。

問題文中では「歴史学」を主語として「……を念頭に置いてきた（第4段）」・「……を知った（第7段）」・「……を捉え直そうとする（第8段）」・「……を自覚する（同）」などの《活喩＝擬人法》の表現が散見される。国語の答案では一般に、《譬喩》はそのままでは「説明」とは見做されない。《要旨》の問題とはいえ、答案が原文の文脈に依存するのは考えものである。答案で「歴史学」を主語とする必要があれば、述語に意志を含む表現は禁物だ。（「第1文」の表現は「自明の前提として成立していた」の意味なので許容される。）

第10段に見られる並列表現の答案中での扱い方にも注意すること。国語の答案では一般に、問題文中の並列項目を答案に持ち込む際には、それらすべてに共通の概念にまとめて表現することが望まれるが、それができない場合には、筆者の挙げたすべてを答案にも盛

り込むことが要求される。第10段に挙げられた二項目は「例示」ではなく「具体化」だから、二項目を対等に扱って見せることだ。

補足：《主題》・《標題・表題》について

本問には直接には関係ないが、《要旨・要約》に関連して、《主題》・《標題・表題》についても簡単に述べておく。

《主題》とは、通常は「筆者の趣旨の結論となる考えを一文のかたちで表現したもの」と考えればよい。これに対して《標題》または《表題》とは、「主題文の主部（《主部》＝主語文節を被修飾語とする連文節）を取り出したもの」と考える。《主題》が「＊＊＊は○○○だ」・「＊＊＊は○○○する」と表現されるとき、「＊＊＊」が《標題・表題》となるということである。

ただしこれも（《要旨》と《要約》の関係と同様に）、入試問題の設問用語としては、必ずしも右のとおりになるとは限らない。現在の大学入試では主題や標題（表題）を求めるのに記述答案を要求する出題は稀で、出題されるときは選択問題となるのが通例だが、その場合、設問に「主題として最も適当なものを選べ」とあるのに選択肢が体言止めになっていることがある、ということである。とはいえ、選択肢に体言止めの《句》と述語を含む《節》が混在することはないといってよいから、気にするほどのことはない。

【問題】（演習／京大・難関国公立大対応問題）

出典…源俊頼『俊頼髄脳』　／　鹿児島大学　教育学部　92年

現代語訳

和歌（を読むとき）の八つの悪癖の中に、後悔の病という悪癖がある。歌を、時間をかけずに作りあげて、人に（こんな歌を詠んだと）語ったり、（記録に残る手紙などに）書きつけたりして、後になって、（もっと）よい言葉や言い回しを思いついて、「こんなふうに詠まずに（いたとは何と浅はかだったのか）」などと思って、悔やみ（、公表してしまった歌の不出来を）不快に思う（こと）を言うのである。したがって、（なんといっても）やはり、歌を詠むならば、急ごうとしないのがよいのである。いまだに、昔から、急いで詠んだ（歌）に立派なものはない。だからこそ、（古今集の撰者となったほどの達人である紀）貫之などは、歌一首を、十日（も）二十日（もかけ）などして詠んだのだという。しかしそうではあるが、（その歌の必要となる）時宜にしたがい、事情によるのがふさわしい（ので、急いで詠まなければならないこともあるにはあろう）。

（拾遺集などに名を残して夭逝した藤原）道信の中将が、山吹の花を持って、（中宮彰子が滞在中の清涼殿の）上の御局といっているところ（の前）を通り過ぎたところ、（中宮に仕える）女房たちが、大勢詰めていて（御簾の中から）あふれ（かねないほどだったので、通り過ぎる道信をめざとく見つけ）て、「そんなにすばらしい（みごとな山吹の花などという）ものを持って（いながら）、何もしないで過ぎ去るようなことがありますか（、いいえ、黙って通り過ぎてはいけませんわ、お得意の歌を聞かせてくださいな）」と、（道信に）話しかけたところ、（道信は言葉を掛けられることを予想して、歌を）あらかじめ用意してあったのだろうか、

くちなしに……（山吹と同じ黄色の染料を採る）梔子（くちなし）ではないが、口のない私は物が言えないので（、ただ黙っているしかない。だから、私が言葉を掛けないことを示すのに、）梔子で幾度も幾度も染めた（ような、この山吹を持っている）のですよ。

と（詠んだ歌の上五七五を）言って、（持っていた山吹の枝を御簾の中へ）差し入れ（て女房が下の句をつけるのを待ってい）たところ、（廊下の道信に近い、端のほうにいた）若い女房たちは、（経験不足でこの句に対してとっさによい下句をつけることができずに、その枝を）受け取ることができなかったために、（ちょうどそのときに、部屋の）奥に（これも後拾遺集などで有名な女流歌人である）伊勢大輔が伺候していたのだが、（その伊勢大輔に）「あれをお取りなさい〔＝山吹の花を受け取って、下七七を付けなさい〕」と、中宮（彰

子）がおっしゃったので、（伊勢大輔は、中宮の御下命に）お引き受けになって、（端近くまでのほんの）一間ほどの距離を膝立ちですべり出ていたうちに、（すぐに下の句を）思いついて、

こはえもいはぬ……これはまた、口がなくて何も言えない（しるしに持っているということですが、本当に、梔子で染めたように）何とも言えないほど美しい花の色ですねぇ。（それほどに美しい山吹にうっとり見とれてしまって、詠みかけてくださったあなたの句にもすぐには何も言えなくなってしまったほどですわ。）

と、（みごとな下の句を）付けたのだった。これを、（一条）帝がお聞きあそばして、「（もしその場に伊勢）大輔がいなかったとしたら（どうなっていたことだろうか）、（中宮の立場としては面目まるつぶれで）恥さらしなことになっていたのだろうねぇ」と、おっしゃった（という）。このようなことを考えると、知性の働きが機敏である（ためにすばやく歌を詠める）のも、すぐれたことである。知性の働きが機敏に歌を詠んでいる人は、なまじ、長いこと（歌を）考えると、つい下手に詠むことにならずにはいられないものである。考えもゆっくりと（長考して歌を）詠み終える人は、すぐさま（歌を）詠もうとしても（うまく）できない。（そのことも考え合わせると）ただもう、（その人の）本来の天性に従って、（歌は）詠み出さなければならないのである。

解答

問1 惜しいことをした。　／　つまらないことをした。〔別解例〕

問2 女房たちに何の言葉もかけないこと。

問3 前もって、女房に話し掛けられたときに備えて句を準備してあったのだろうか。

問4 詠みかけられた上の句の「くちなし」に「口無し」が掛けられていることを引き取って「えもいはぬ」と言うことで縁語としつつ、若い女房たちが返歌できなかったことを弁護するという工夫。〔87字〕

問5 なまじ長い間考え込むとかえってつい下手に詠んでしまうものだ。

問6 歌を詠むときは、出来上がりの速さ遅さを気にせずに、詠み手の得意なやり方で詠むのがよいということ。〔48字〕

【問題】（自習／京大・難関国公立大対応問題）

出典…阿仏尼『夜の鶴』／九州大学　97年

現代語訳

まず、歌を詠むような人は、物事にあたっては情趣を第一として、何かにつけて興るしみじみとした情感を知り、いつでも心を清澄にして、花が散ったり木の葉が落ちたりすることも、露や時雨（、またそれと同じころの花や木の葉の）色が変わる時節についても、目にも心にもとどめて、歌の風情を、日常いつでも忘れないようにしなければならないものでございましょう。

また、四季の歌（の分野）では、作りごとがしてある（のは）よくない。ひたすら、あるがままのことを、上品に扱って詠むのがよい。

恋の歌は、技巧的な言い回しや作りごとが多いけれど、（こちらのほうは）とりたてて不都合なことでもない。「枕の下に海はあれど」（とか）、「胸は富士袖は清見が関」と（かいうの）も、単に、（恋の）思いが切実である有りさまを言おうとして（のことであって）、（恋心の切なさを）どのようにでも譬えるような点は、四季の歌とは異なるのは当然だ、と（亡夫・為家は）おっしゃいました。

また、（その）四季の歌の作りごとも、詠み方によ（っては許され）るにちがいない。遍昭僧正が「玉にも貫ける春の柳か」などと詠んでおられるのをはじめとして、「有明の月と見るまでに吉野の里に降れる（白）雪」（と詠んだり）、（桜の）花のことを「雲に似たり」とも表現するなどのことは、（たしかに）そらごとではあるが、真実そう思われることであるからには差し支えない。（一方）そのよう（な場合）でなくては、ありもしないことを（歌に）詠んではならないということも、深く深く弁えて判断するのが当然なのでは（ないでしょうか）。

また、「故郷」という題で、（ただ）「ふるさと」とだけ（歌の中に）詠み入れることは、当たり前のことのようだけれど、普通の歌にも「ふるさと」など（という普通の言葉）は詠み入れることであるから、特に「故郷」と指定するような題のときは、「奈良の宮」とでも（、あるいは）「難波の宮」とでも「志賀の宮」とでも、（古都として）昔から有名なところを詠みたいものだ、と（亡夫の教えが）ございました。

「月の前の恋」と「月に寄する恋」という題（の違い）についても、多くの人が（この両者を）区別せずに、ただ同じようによむこ

とは、（考えが浅くて）残念なことでは（ないでしょうか）。「月に寄する」と（いっ）ては（月に因むということで）、ただ「月」という一語を借りて（すませて）しまえば、（それで一応は月に）寄せている（ことにはなる）に違いない。（たとえば西行法師の、）

月のみや……月だけは、上空に浮かんでいて当てにならない（何かを思い出す）よすがで（すが、あなたがそれを見て私を）思い出してくれでもすれば（二人の）心は通じ合うことになるのでしょうか

などのような（詠み方）を、「（月に）寄せている」と申せばよいのでは（ないでしょうか）。（それに対して、）「月の前」というのは、月に面と向かっているよう（な詠み方）で（あるのをそう言わ）なければならないのでは（ないでしょうか）。

恋しさは……（あなたへの）恋しさは（満ちても仕方もない）虚空いっぱいに満ちてしまったので、（そうなってしまうと）澄みわたる月も（私の）心のうちに住むというものであるよ

という（意味の）歌も、（亡夫の祖父である）俊成卿が「月の前の恋」という題で詠みなさったとかいうことだ。

また、「うれしかりけり」とか「かなしかりけり」とかいう言葉を、未熟な歌人はいつも好んで詠むものです。真に喜ばしいこと、真に嘆かわしいことでなくては、いつも詠んではならないことだと、（亡夫は）おっしゃったことでございました。

〔参考〕

しきたへの枕の下に海はあれど人をみるめは生ひずぞありける　（『古今集』紀友則）

……枕の下に海ができるほど切ない思いに涙を流しても、その海には海藻が生えないのと同じように、あの人に逢うことはできないのだなあ

胸は富士袖は清見が関なれや煙も浪もたたぬ日ぞなき　（『詞花集』平祐挙）

……私の胸は（燃える思いを内に秘めるから）富士山で、私の袖は（涙をせき止めるから、富士山に近い）清見が関なのだなあ。（富士山のように）煙も（清見が関から見える海のように）浪も（心の中に）立たない日はないものだ。

浅みどり糸よりかけて白露を玉にも貫ける春の柳か　（『古今集』遍昭僧正）

……浅緑の糸に縒りをかけて白露を玉のように貫いた春の柳であることよ

あさぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪　（『古今集』坂上是則）

……あけがたになって有明の月が残っていると見えるほどの明るさまでに、吉野の里に降っている白雪の清浄さよ

訳註　原文中の一部の「申さる」を「言う」の尊敬語として訳してあるが、これは、亡夫から自分への言葉を謙譲語で表現したとすれば自分を敬うことになって不自然であるために、「申す」を謙譲語でなく尊大語として見たためである。

解答

問1　和歌の用語や修辞技巧

問2　それぞれ「独り寝の寂しさのために恋の思いに溢れる涙」を「海」に、「思いこがれるほど胸中に激しく燃える恋心」を「富士の煙」に「よそへ」ている。〔解答例・70字〕

問3　「月の前の恋」では、実際に月に向かい、自分の恋心を月になぞらえて詠むのに対して、「月に寄する恋」では、単に月という素材に因んで自分の恋心を詠むだけでよいという相違。〔解答例・82字〕

問4　(a)＝技巧的な言い回しや作りごとが多いが、とりたてて不都合なことでもない
(b)＝歌の読み方によっては許されるに違いない
(c)＝わざわざ「故郷」と指定するような詠題では
(d)＝残念なことではないだろうか
(e)＝力量の未熟な歌人

問5　と申され候ひき〔6～7行目〕／と候ひき〔14行目〕／とぞ申され候ひし〔22行目〕

問6 『十六夜日記』／『うたたね』

解説

問1 名詞「情（なさけ）」は、対象を損なうまいとする①「思イヤリ、人情」の意が原義だが、和歌で使用する場合は、②「モノノアワレヲ知ル心、情趣ヲ解スル心」、③「風情、情趣」などの意で使用する場合が多い。本文脈では、和歌の表現に関して述べており、「持つ」などの動詞の提示もないので、③の意で解釈するが、②でも文脈上は差し支えない。

そこで、本段落の傍線部以降の構造を、接続助詞および各節の末尾表現に着目して追っていくと、「情を先として／もののあはれを知り／つねに心をすまして／花の……落つるをも／露しぐれ……折ふしをも／目にも心にもとどめて／歌の風情を起ち居につけて／心をかくべき（述部の中心部分）」となる。ここで、それぞれの節の末尾に現れた表現については、

「て」＝文章完結力の弱い接続助詞「て」を使用しているため、前文の主語を受けて後続文脈につなげる

「しり」＝連用中止法によって後続文脈との並立化を示す

「も」＝並立を示す係助詞「も」によって後続例示部分との並立を示す

の三種類が見られるが、これらをまとめると、全体に歌を詠もうとする者に対してのなすべき心得を述べているだけで、設問で要求された比較対立項目は示されていないことがわかる。

そこで、次段落以降をさらに探究していくと、第二段落冒頭において、「四季の歌には、そらごとしたるわろし」と「そらごと」について避けるべきであると述べていることに目がいくであろう。名詞「そらごと」は直接的には「嘘、偽リ」の意であるが、本文脈では、「四季の歌」を詠むときの心得について述べているので、「作為的ナ表現」程度の意で解釈すればよいだろう。また、第三段落以降でもこの「そらごと」に関する問題が述べられているので、これを「情」に対立する概念として捉えていると推定される。

では、和歌における「作為的ナ表現」とは何か、と考えてみると、いわゆる歌語（＝和歌に使用する言葉、例えば、「蛙」に対する「かはづ」、「鶴」に対する「たづ」など）や修辞技巧がこれに当たると考えられる。よって、正解は「歌語や修辞技巧」となる。

問2　動詞「よそふ」は、「寄そふ」又は、「比そふ」と表記し、①「アルモノト関係ヅケル」、②「クラベル、タトエル」の意がある。ここでは「枕の下」に本物の「海」が存在するはずもないし、「胸」の中に本物の「富士」が存在するわけもなく、つまりは何かを「海」「富士」に「タトエ」ていると考えることができるので、②の意で解釈する。

では、何について比況を行っているのか後続文脈を追って探究すると、直後に「ただ、思ひの切なる風情をいはむとて（＝タダ思イガ切実デアル有リサマヲ言オウトシテ）」とあり、本段落冒頭で、「恋の歌は」と、恋に係わる歌について述べていることがわかるので、この「思イ」とは、「恋ノ思イ」であると考えられる。したがって、「恋ノ思イガ切実デアル有リサマ」に関して、「海」および「富士」を喩えに使っているということを前提として、それぞれの和歌を見ていくことになる。

「しきたへの……」の歌では、「枕の下に海はあれ」と、枕の下に「多量の水分」が存在することを暗示する表現となっていることに気がつくだろう。すると、この「水分」とは、「涙」のことであると推定でき、この涙の原因を考えると、下の句で「人をみるめは生ひずぞありける（＝アノ人ニ逢ウコトハデキナイノダナア）」とあるので、「恋しい人に会えない」ことが原因の涙であると考えられる。

次に「富士」に関して検討すると、下の句に「煙も浪もたたぬ日ぞなき（＝煙モ浪モタタナイ日ハナイモノダ）」とあるので、この「煙」が「富士」に係わる縁語として示されていると考えられ、そうすると、「燃える」ような恋の思いを「富士の煙」に喩えていると考えられる。富士山は江戸時代まで噴火の記録があり、（しばらく前までは「休火山」と呼ばれたが、まぎれもなく）活火山である。古文の書かれた時代には盛んに煙を上げる山であった。

以上のことから、「独り寝の寂しさのために恋の思いにあふれる涙」を「海」に、また「思い焦がれるほど胸中に激しく燃える恋心」を「富士の煙」に「よそへ」ている、といった解答を作ることができる。

問3　この二句の相違点は「月の前」と「月に寄する」なので、この二語に関する筆者の定義文をまず押さえるようにしたい。

まず「月に寄する」に関しては、15～16行目の「月に寄するとて、ただ月といふ文字を借りつれば寄せたるにてあるべし（＝「月ニ寄セル」トイッテハ、タダ「月」トイウ一語ヲ借リテシマエバ、寄セテイルコトニハナルニチガイナイ）」に注目したい。つまり、「月に寄する」の場合、「月」という言葉を使用して（「月」を歌の素材にして）、恋の歌を詠めばよいということで解釈できるだろう。さらに、その例示として示されている西行の「月のみや……」の歌は、月という言葉を和歌中に使用してはいるが、自分自身

の心情に仮託するといった手法は採っていないことに注意したい。

これに対して、「月の前」に関しては、18行目の「月の前とは、さしむかひたるやうなるべきにや（＝月ノ前トハ月ニ面ト向カッテイルヨウデアルノヲ言ワナケレバナラナイノデハ）」が筆者の「月の前」に関する定義文と考えてよいだろう。さらにその例示として示されている俊成の「恋しさは……」の歌では、下の句で月と自分の心情に関わりを持たせていることに着目したい。

そうすると、これらを合わせて、『月の前の恋』では、実際に月に向かい、自分の恋心を月になぞらえて詠むのに対して、『月に寄する恋』では、単に月という素材にちなんで自分の恋心を詠むだけでよいと言う相違。」程度の解答が作成できる。

問4

(a)　傍線部を品詞分解すると、「利口（名詞）＋そらごと（名詞）＋多かれ（形容詞）＋ど（助詞）＋わざと（副詞）＋も（助詞）＋苦しから（形容詞）＋ず（助動詞）」となる。まず、名詞「利口」は、①「ジョウズニモノヲ言ウコト」、②「滑稽ナコトヲ言ウコト」、③「賢イコト」の意があるが、本文脈では、「恋の歌」の作歌法について述べているので、①の意を拡大して、「技巧的ナ言イマワシ」程度の意で解釈する。名詞「そらごと」は**問1**で既出。「作為的ナ表現」程度の意で解釈する。接続助詞「ど」は逆接確定条件。「ケレドモ」程度の意。副詞「わざと」は①「意識的ニ、ワザワザ」、②「トリワケ、コトサラニ」、③「公式ニ」、④「ホンノ少シ」などの意があるが、ここでは、後続文脈で形容詞「苦し」を修飾しているので、②の意で解釈する（「わざと」の②の意は形容詞、形容動詞などの様態を修飾する語の場合に多く使用する訳出例であることを覚えておきたい）。形容詞「苦し」は、「心身の痛みのために目がくらむほどつらいと感じる様子」が原義。①「（精神的、肉体的ニ苦痛ガ感ジラレテ）ツライ、苦シイ」、②「気ガカリダ、心配ダ」、③「見苦シイ、不快ダ」、④「不都合ダ、差シ支エガアル」などの意がある。本文脈では、下接する語が《打消》助動詞「ず」であるので、④の意で解釈する（「苦し」の④の意は、打消表現や反語表現を伴って使用されることが多いことを覚えておきたい。殿様などが言う「苦しゅうない」である）。以上を合わせると、「技巧的ナ言イマワシヤ作為的ナ表現ガ多イケレドモ、トリワケ不都合ナコトデモナイ」程度の意となる。本問での解釈のポイントとしては、①「利口、そらごと」の文脈に沿った語釈、②副詞「わざと」の語釈、③形容詞「苦し」の解釈が中心となるので、これらに留意して訳出されたい。

(b)　傍線部を品詞分解すると、「やう（名詞）＋に（助詞）＋よる（動詞）＋べし（助動詞）」となる。名詞「やう」は「様」と表記し、①「様子、アリサマ」、②「外見ノ形、状態」、③「様式、方式」、④「子細、事情」などの意がある。ここでは、「四季の歌のそらごと（＝四季ノ歌ノ作リゴト）」ということに関して述べられているので、③の意で解釈し、文脈から、「歌ノ詠ミ方」程

度の訳出を行えばよい。動詞「よる」は「因る」と表記し、①「基ヅク、原因スル」、②「従ウ、応ジル」、③「根拠トスル」等の意があるが、本文脈では、②の意。助動詞「べし」は《当然》を原義として、ここでは筆者の《確信推量》意を示す。「……ニ違イナイ」程度の意。以上を合わせると、まずは「歌ノ詠ミ方ニ応ジルニ違イナイ」といった解釈が可能になる。さらに、傍線部の主語は前述のとおり「四季の歌のそらごと」であるので、本段落は、第二段落冒頭で「四季の歌には、そらごとしたるわろし（＝四季ノ歌ノ分野デハ、作リゴトガシテアルノハヨクナイ）」と述べていることに対して対比的な内容を述べた段落であると推定し、「四季の歌に関して作りごとをすることも詠み方によっては許される」という意で解釈できる。第二段落の「わろし」との対比で考えると、「よろし」程度の語が補充できると考えられる。「よろし」は「ふつうだ・そう悪くない」などと訳すことが多く、この文脈でも条件付き認容程度の意で解釈するのが妥当であろう。したがってこの「許サレル」を補充して、「歌ノ詠ミ方ニ応ジテ許サレルニ違イナイ」という解答を作ることができる。

(c)　傍線部を品詞分解すると、「さして（副詞）＋故郷（名詞）＋と（助詞）＋いは（動詞）＋む（助動詞）＋題（名詞）＋にて（助詞）＋は（助詞）」となる。副詞「さして」は、①下に打消の語を伴って「コレトイッテ、タイシテ」、②「トクニ、トリワケ」という意があるが、本文脈では、後続文脈に打消表現は存在しないので、②の意で解釈する。助動詞「む」は文中用法として使用されており、体言に上接しているので、《婉曲》意で解釈し、「……ヨウナ」程度の意をあてる。格助詞「にて」は、本文脈では《資格・状態》を示す機能。「……デ」と訳出する。以上を合わせると、「トクニ『故郷』トイウヨウナ題ノ場合ハ」となる。さらに「ただの歌にもふるさとなどよむことなれば（＝普通ノ歌ニモフルサトナドトイウ普通ノ言葉ハ詠ミ入レルコトデアルカラ）」という前文脈の「ただの歌」に対する「さして故郷といはむ題」であると考えると、本傍線部は、「故郷」という題を指定して歌を詠む場合、ということを特に述べていると考えられる。したがって、文意を明確にするために、これを補入して「トクニ『故郷』ト指定スルトイウヨウナ題デハ」程度の解答を作ることができる。

(d)　形容詞「念なし」は①「無念ダ、残念ダ」、②「タヤスイ、容易ダ」、③「思イガケナイ、意外ダ」の各意があるが、ここでは上接文脈の「『月の前の恋』、『月に寄する恋』といふ題をも、人みな分かで、ただおなじさまによむこと」に対して否定的な意見を表出していると考えられるので、①の意で解釈する。係助詞「や」は結びの語を省略した形で「あらむ」を補充して、《推量》を含む軽い疑問を表す。「……デハナカロウカ」程度の意。以上を合わせると、「残念デハナカロウカ」という訳出が行える。

(e)　名詞「未練」は、①「マダ熟練シテイナイコト」、②「アキラメキレナイコト」の各意があるが、ここでは格助詞「の」によっ

て連体修飾する名詞が「歌よみ（＝歌人）」なので、①の「練度ガ低イ」意で解釈し、「力量ノ未熟ナ歌人」程度の意で訳出すればよい。

問5　設問文の「ある人物から聞いた作歌に関する知識をまた別の人物に伝えるというスタイル」とは、他人から聞いたことを伝えることを示すわけで、その表現は、当然のことながら、伝聞的表現になるはずである。つまり、問題文中で伝聞的を示す表現を探索していけばよい、ということになる。

そうすると、まず、6～7行目の「と申され候ひき」、続いて22行目の「とぞ申され候ひし」が見つかるであろう。

さらにこの表現がかつて聞いたことである（＝過去表現）ということを考えると、14行目の「と候ひき」という表現も、これに該当すると考えられる。ここから丁寧語や時制表現を取り去った「……とあり」は、「……とのお言葉がある」あるいは「……とのお気持ちがある」の意で、他者の発言または意向を表現するのに使う常套句である。

因みに、3行目「候ふらむ」は《現在推量》助動詞を使用しているため、解答とはなしえない。

問6　阿仏尼は鎌倉中期の歌人。安嘉門院に仕えていたころ、若い公卿と恋に落ち、子供までできたが、結局捨てられてしまい、そのため尼寺に駆け込んだ後、養父・平度繁と遠江に行くが、単調な生活を嫌い、京都に舞い戻る。その後、当時の歌壇の重鎮であった御子左家の藤原為家（藤原定家の子）の妻となった。この夫・為家の死後、相続を巡る訴訟のため、鎌倉に下向した際の日記が『十六夜日記』であり、旅の動機、道中記、鎌倉滞在記、長歌からなっている。また、他の著作としては若い頃の公卿との恋愛関係を記した日記『うたたね』が存する。よって、このいずれかを解答とすればよい。阿仏尼の作品としては、上記二作品に加えて本問の出典である歌論書『夜の鶴』を覚えておきたい。